変恋

幽鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変恋

【Ｎコード】
Ｎ０７５１Ｐ

【作者名】
幽鬼

【あらすじ】
ごく普通の女子高生橋口椿が突然ナンパされ、その後……

～あの日から～（前書き）

変恋をご覧の皆様へ注意を少々…
まず、性描写が軽くありますので苦手な方はお戻り下さい。
小説は本当に素人ですのでわかりにくい表現があると思いますが、
それでも宜しければご覧下さいませ…

～あの日から～

どういうことなの……！？
私は橋口椿。高校2年のごく普通の高校生…なのに。

それはよく晴れた街中でだった。
「お嬢さん、ちょっと…」
そう言って肩に触れてきた。
「ちょっと！何！？」
振り向くと長身の若い男の人。……カッコイイ部類に入るのかな…
「やっぱり……俺好みの女」
「はぁ！？」
ナンパなの？これ…
いや、惑わされてはダメよ、椿。
「まぁ、会ったばかりで戸惑うのはわかるよ。で、これから僕とお茶でも…」
「お断りします」
男の人の言葉を遮り、断った。
冗談じゃないわよ。アンタみたいな変人にホイホイとつられてたまるものか。
「じゃあ、急いでるので」
私はその場から早急に立ち去った。このあと塾があるのよ。

これがあの人との出会いだった…

～出会い～

「最悪」
学校へ着いて開口一番がそれ。
「椿、眉間にシワが寄ってるよ。美人が台なし」
話しかけてきたのは五十嵐あゆみ。同じクラスの親友。
「美人じゃないから平気。生徒手帳落としたみたい…」
「どこに？塾とかじゃないの？」
「かもね…」
昨日変な人に絡まれたせいで色々とパニックよ…
生徒手帳には予定が書いてあるのに…
「てか、椿さ、美人なのに何で無自覚なの…」
「それって自覚するものなの？」
「いや、自覚されても困るけどさ…」
どっちなのよ…
そういえば今日は英語の文法テストだ。英語は苦手な方。だから昨日塾で必死になって勉強した。
「椿、今日ってテストでしょ？勉強した？」
「もちろん。不定詞は特に苦手だし」
「すごいね…流石がり勉女の子」
「やめてよ。がり勉な訳じゃないし…」
話しているとＨＲ始まりのチャイムが鳴った。
「英語、一限目じゃん…」
あゆみがうなだれる。
「大丈夫！頑張れ」
「アンタは平気だろうけど私はノー勉なの…」
そりゃ、アンタが悪いんでしょ。とは口には出さない。
テストが始まる。とは言っても小テスト。そのテストは私が勉強したところばかりが出たからなんとかなった。

そのあとの授業もいつものように過ごしていた。

さて、帰ろう。校門へ向かうと車が止まってる。
若干嫌な予感がする……
「やぁ、また会ったね」
街中でナンパしてきた男が立っていた。

～謎の男～

「何でこの高校に……ストーカーですか」
「ストーカーとはひどいな。俺は生徒手帳を届けにきたのに」
男が持っていたのは紛れも無く私の生徒手帳。
「返す代わりに、俺に付き合ってくれる？椿ちゃん」
「……わかりました。でもその前に名前を教えて下さい」
「そういえば名乗ってなかったな。俺は結城学園大学1年の櫻井修」
結城学園って…金持ち学校よね？そんな人が何で私に付きまとうのかしら…
「じゃ、乗りなよ。エスコートするから…」
と、櫻井さんは近づく……て、
「近い近い！！顔が近い！！」
「つれないなぁ…椿は」
いきなり呼び捨てかよ！
「で、櫻井サン。私はどこへ連れ回されるのですか？」
櫻井さんの車に乗り、どこへ行くのかもわからないまま連れてかれる。
「下の名前で呼んで欲しいな。それと敬語もいらないよ。イイトコ、かな」
具体的に説明してよー！
イイトコ、って何？！
訳もわからないまま連れて来られたのは……バー？
「着いたよ。お手をどうぞ……」
櫻井…じゃなくてオサムさんは手を差し延べてきた。
手をとるべきなのかな…
「大丈夫だ。安心して」
真っすぐな瞳に負けてしまった…
そのまま手を繋いだままバーへ入っていく。

「オサム、やっと来たのね」
「すまないな、ヒロミ。少々手こずった」
ヒロミと呼ばれた女性…にしては背が高いな…もしかしたら男性かもしれない…
「ヒロミ…今日も君は美しいよ…」
「まぁ、オサムったら…」
……これっていわゆる…
「ホモ……？」
「俺は女性も男性も平等に愛することができるのさ…」
いや、格好つけて言うことじゃないでしょ…
「まぁまぁ、立ったままじゃなんだし、座りなさいな」
「はぁ……」
ダメだ、思考回路が…
「で、生徒手帳は？」
「そんなに急かすなよ。ちゃんと返してあげるから」
「そういえば、自己紹介が遅れたわ。アタシは新崎広海。オサムとは幼なじみで同じ大学の１年」
この二人…私と２つしか変わらないのにだいぶ大人びて見える…
「私は橋口椿です。オサムさん、私をここに連れて来た理由は」
「んー…なんとなく」
は……？
「君と話をしたかったんだよ。で、ヒロミの親が経営してる店に来た」
「ごめんなさいね。オサムったら半ば強引に連れ込んだのね」
「ヒロミさんが謝ることじゃないですよ」
謝るべきはコイツ！と言いたいとこだけど…
「ヒロミ、コーヒー」
「はいはい。お嬢さんは？」
「……日本茶あります？」
「椿、日本茶かよ…」

「いいじゃない。アタシだってよく飲むわよ。コーヒーと日本茶ね」
と、手際よくコーヒーと日本茶を入れてくれる。
「はい、コーヒーと日本茶」
ヒロミさんは私たちにお茶を出してくれた。
「ありがとうございます…」
「じゃ、俺たちは愛を語り合おうか…」
オサムさんは私の肩を抱き寄せる。
「あの……ヒロミさん、この人はいつもこんなんなんですか？」
「そうよ…呆れちゃうかしら」
「慣れない私にとっては…」
そう、とヒロミさんはオサムさんの手をペシッと叩いた。
「そういえば、もう8時になるけど、親御さんには連絡しなくて平気？」
「…私、一人暮らしなので」
私は連れ子で、今の母親は本当の母親ではない。つまり再婚したのだ。母親は私のことを嫌っている。
『お金は出すから……出て行って』
義母が最後に言った言葉。悲しくて悔しかった。元々は私の家だったのに…
「大丈夫か？」
オサムさんの手が私の頬に触れる。
「大丈夫。でも帰るよ…ヒロミさん、ごちそうさまでした」
「ううん。私、夜はたいていここにいるからいつでも寄ってね」
「はい。じゃあ、また…」
「送るよ。外は暗いし…」
「……」
いまいち、この人が掴めない。
「そんなに信用ねぇか。ま、まだ何もしないよ」
まだって何！？
とりあえず、送ってもらうことにした。

「家まで送るから案内して」
「わかった…」
この人……悪い人ではないのかな…まだわからないわ…

～気になる～

送ってくれた後、手帳はちゃんと返してもらった。でも、これでオサムさんと会う必要もないんだ…
あれ？私、がっかりしてるのかな？なんでだろ、清々するはずなのに…

次の日も学校。私はあゆみに詰め寄られた。
「ねぇ！昨日の男の人、誰！？」
「手帳拾ってくれた人。とんでもない男だった」
「えーかっこよかったじゃん」
「カッコイイ部類に入るんだ。なんていうか…俺様みたいな…でも違うような…とりあえず変な人」
「何それー」
気になるのは確かなんだ。でもなんでだかわからない…変人だからかな…　授業もオサムさんのことで頭がいっぱいだった。
今日は確かこの後バイトだ…
バイトはコンビニの店員。いくら義母がお金出してくれているとしても、お小遣を稼ぎたい。
バイトは５時から１０時の５時間。大変だけど、やり甲斐があるし、みんないい人だから大好きなんだよね。
「いらっしゃいませ」
「あ、椿」
来たのはオサムさんだった。
「…なんでここに…」
「偶然だよ。俺は知らなかったし」
「ストーカーよ。やっぱり」
「今日は学校で疲れたからコーヒー買って帰るよ」
オサムさんは言った通りにコーヒーを買って帰った。

仕事が終わり、私は帰路へ向かおうとした…けど、
「ヒロミさんのとこ、行こうかな…」
夜いるって言ってたし…でも今から行くと１０時半くらいか…迷惑かな…
「もういいや。行こう」
ヒロミさん（正確に言えばヒロミさんの親）の店へ向かう。
「あら、椿。いらっしゃい。今日はオサム、来てないわよ」
「オサムさんじゃなくて、ヒロミさんにかな」
「アタシ？何かしら」
聞きたいことはいっぱいあるけど、まず…
「ヒロミさんもお金持ち…ですよね」
「そうね…使用人もいるし…」
「私もね、父さんは海外でお仕事してるんですよ。だからそれなりにお金は持ってた…」
「持ってた…？」
「幼い時に母さんが病気で亡くなって、その再婚したんだけど、その人は私のこと、嫌ってるから…私、家追い出されたの」
「…昨日は悪いこと聞いたわね…」
ヒロミさんが悲しそうな顔をする。
「でも、私も全部義母のせいにして、悲劇のヒロイン気取ってる。ただ逃げてるだけだった…」
「椿……」
泣きそうになったけど、ぐっと堪えた。
「ごめんなさい、こんな話しにきた訳じゃないのに…」
「いいの。あなたにとってここが安らぎの場所になるならいつでも来ていいんだから」
優しいなぁ…ヒロミさん…「それと、オサムさんのことなんだけど…」
「オサムのこと？」
「あの人……何だかわからなくて。昨日幼なじみだって言ってたか

ら…」
「彼は簡単に言ったら自由人ね。やりたいことはすぐに実行するの。それに器用だからなんでもこなせるのよ」
自由かぁ…いいなぁ…
「あなたも相当自由よ？一人暮らしだし、こんな時間にこんな場所に来てるんだから」
「あ、そっか…」
「あなた、オサムの事気になるのね」
ヒロミさんが意味深に笑う。
「気になるのは確かなんだけど…」
「恋、しちゃった？」
恋……？
「恋した事ないからわからない…」
「その人の事が気になって仕方ないって事。もっと知りたい、知ってもらいたいって思わない？」
「……思うかも…」
俯いてそう言うと、ヒロミさんが抱き着いてきた。
「かわいいー！！椿、恋する乙女ね！」
「わかったから、放して下さい！」
そう言うとすぐに放してくれた。
ヒロミさん…お母さん的存在なんだなぁ…
「ってもう12時よ。帰らないと。明日も学校でしょ？」
「うん。ヒロミさんもでしょ？じゃあ、帰ります」
私は席を立った。
「送るわ」
「大丈夫です。家近いから」
「……そう？」
ヒロミさんは納得しないような顔をしてる。
「はい。じゃあ、さようなら」
「変な男について行っちゃダメよ」

「はーい」
私は笑って答えた。ドアを開けたその先に…
「なんでお前がいるんだよ」
オサムさんだった。
「私のセリフだよ。家に帰るんじゃなかったの？」
「帰ったよ。でも、暇だったからさ、ここに来た」
疲れたなら寝ていればいいのに。コーヒーのせいで寝れないのかしら。
「私は今帰るところだから」
「一人で？危ないよ」
「平気よ。じゃあ……っ！？」
いきなり手を引かれた。私はオサムさんの胸に飛び込んだ形になった。
「何するの！？」
「俺…」
オサムさんの顔は真剣だった。
「お前の事、好きなのかもしれない」

～告白～

『お前の事、好きなのかもしれない』
これはどう反応すればいいワケ！？
「あの…」
突然強く抱きしめられた。私は必死に振りほどいた。
「なんで逃げるんだよ」
「そんな中途半端な言葉が気に入らないのよ！！」
泣きたくなんかなかったけど、涙が出てしまった。
「かもしれない。なら私はアンタを受け入れない。私は恋なんか、一度もしたことがなかった。でも、さっき自覚した。変な人って思ったけど、もっと知りたいって思った。好きってこともわかったのに…」
涙を服の袖で拭った。
「……ごめん。心の準備期間をちょうだい」
走って逃げようとした。しかし、後ろから抱きしめられて逃げられなかった。
「嫌だ…」
彼は耳元で弱々しく言った。
「さっきのは、訂正する。好きだ。椿が好きで堪らないんだよ。じゃなきゃ、付き纏ったりしない。気にかけたりなんかしない…」
私を抱きしめる腕が震えていた。この言葉に嘘はないよね…？でも……
「3日だけ、返事を待ってくれる？やっぱり、準備が必要なの…」
「わかった……」
彼は腕をほどいた。けど、ぬくもりが、残ってる…
「夜中だ…送る」
「うん……」
その後、車の中でも話はなかった。

「じゃ…」
「あっ、待って！」
エンジンをかけようとしたオサムさんを引き止めた。
「携帯の番号とアドレス…交換しよ」
「あぁ、いいよ」
交換し終わったあと、彼は『いつでもいいからな、ハニー』と、キザな言葉を残していった。
私は家に入り、お風呂を済ませ、ベッドに入った。
まだ、あの人のぬくもりが残ってる…やばい、顔がほてってきた…
その日は寝ようとしても眠れなかった。

～返事～

約束の3日がたった。しかし私は…
「頭が痛い…」
考え事とかではなく、ただ単に頭が痛い。念のため、熱をはかってみると、37度5分と出た。
「風邪引いた……」
学校は休まないと無理だ。医者はどうも好きになれない。だから1日休めば良くなるだろう。
もう寝よう…元々は寝不足が悪いんだし…
ぐっすりと寝て、起きてみると夜の7時。お腹は空いてても、体が動かない。こういう時、お母さんがいればいいのになぁ…
あれ？ベッドの端に誰か寝てる…
「誰……」
「ん…あぁ、俺も寝てたか…」
この声はオサムさんだ……って、
「どこから入って…」
「ダメだぜハニー、戸締まりはしっかりしなきゃ」
あ……開いてたんだ…
「私、風邪引いたみたいなの。移ると嫌だから帰って」
「嫌だ。もらうもんもらってない」
もらうもんって……あ、返事か…
「焦らすのはもう勘弁してくれ。あの時、お前も好きって言ったのに付き合えねぇのは辛いんだよ…」
オサムさんの顔は本当に辛そうだった。考えると、私は悪いことしてしまったな、と罪悪感が出てくる。
「返事は今する…心の準備は…まだちょっと足りないけど、気持ちは変わらなかった」
「それは、付き合っていいってことかい？」

私は頷いた。
「ありがとう…」
「もらうもんもらったんだから、もういいでしょ。帰りなよ」
「彼女が風邪引いてるのを放置しておけないよ」
結局、帰らないのね…
「それに、病気の時は誰かいてくれた方がいいだろ」
今までは、私が風邪を引いてもひとりだった。それでも大丈夫だったのに…今は、誰かに、いや…オサムさんについていてほしい…
「お前、なんか食ったか？」
「いらない。食べる気起きない」
「身体もたないぞ」
キッチン借りる、とオサムさんは言って台所へ向かった。
いらないって言ったのに…
『椿、すまないな…』
『お仕事でしょ？仕方ないよ。私、今のお母さんと仲良くするから』
『無理するな…』
『父さん…』
父さんが仕事に行く前に言った言葉。
私、父さんの約束、守ってない…義母さんと、仲良くなんかしてない。
「父さん！！」
「うわっ！いきなり起きるなよ」
夢か……また寝ちゃってたんだ…
「一応、お粥作ったけど…」
料理、できるんだ……
「さっきも言ったけど、食欲ない」
「俺様の料理が食えねぇか」
私はまた寝る体勢になった。しかし…
「寝るな。無理矢理食わすか」
彼が起こした行動は……口移しだった。

「ちょ、何するの！？」
「だって、食わないから」
「食べる！食べるから！」
「残念」
ファーストキスだったのに……
やばい、泣きそう…
とりあえず、さっきのことをされないようにお粥をすべて平らげた。

～どうしよう～

あのあと、オサムさんは１０時くらいには帰った。
学校に行きたいし、勉強遅れるのは嫌。
もう、寝よう…考えると熱出ちゃう。
次の日、なんとか回復したはいいが…
「何でいるのよ…」
朝にオサムさんが車で登場した。
「朝にごめんなさいね。風邪引いたってオサムから聞いたから…」
バイクに乗っていたのはヒロミさんだった。
「ヒロミさん、バイク乗れるんだ…」
「そうよ…そのさん付けやめてちょうだいよ。せめてヒロミちゃんで。あと敬語も」
「わかったよ。ヒロミちゃん。じゃ、学校行くね」
「学校まで送るよ」
オサムさんが言う。
「嫌。目立つもの」
って、もう目立ってるか…学校の前に車止めてたし…
「帰りは俺、用事あるから一緒にいてやれないけど…」
「そっか…あ、遅刻しちゃう。じゃあね！お二人さん」
私は二人に会釈して学校まで走った。
学校に行って、いつも通り授業を受けて、友達としゃべって帰る。
帰りにゲーセン寄ってみようかな…
ゲーセンはひとりで行くのが当たり前になった。逆に友達がいると、集中できない。
しかし、思わぬ人物と再会してしまった。
「…椿さん、ですか？」
金髪の男の子に話し掛けられた。
この子…誰…？

「俺だよ。雪彦」
「雪くん…？」
雪彦は私の弟。と言っても、義母と父の子供。
「久しぶりだね。雪くん。一年ぶり、かな」
「そうだね。でも会えて嬉しいよ、姉ちゃん」
雪くんはあの人以外の前では私を『姉ちゃん』と呼ぶ。義母の前ではさん付けだった。
「ずいぶんと思い切ったことしたね…」
金髪、ピアス…あの人が嫌そうなこと…
「うん…だって、俺はあのババアは嫌いだから」
かなり押し付けられてたし、反抗したくなるのは当然だと思う。
「えっと、どこかに寄らない？俺、姉ちゃんと話したいから」
「いいよ。ファミレス行こうか」
私たちは近くのファミレスに入った。
「あなた、学校はちゃんと行ってるの？」
「サボるときもあるけど、一応行ってるよ」
私と違って、彼は私立の中学に通ってる。中学2年生。
背も、急に伸びたなぁ…
「姉ちゃんは、今の生活に満足してるの？」
「うん。もう慣れたよ」
「俺、あん時わかんなくて…もう会えないかと思ったよ」
正直、私も思った。私を慕ってくれた雪くんに会えないかと思った。
「あれ？ユキ、知り合い？」
金髪の鼻にピアスしてる男が話しかけてきた。
「あぁ。俺の姉ちゃんだよ」
「へぇ、かわいいじゃん」
男がじっと見てくる…私はそれが不快だった。
「久しぶりの再会なんだ。邪魔すんな」
……雪くん、本当に変わってしまったんだな…
「わぁってるよ。ユキはキレると何すっかわかんねぇからな」

男は去って行ったが、まだ不安が残っていた。
「ごめん。俺とつるんでるダチ」
「そう……」
「不快な思いさせたね。移動しよ」
私たちは会計を済ませ、店を出た。
「雪くん、ごめん。私帰るよ」
「じゃあ、送る。姉ちゃんの家、知りたいし」
「ごめん。家はまた今度教えるから」
「……わかった。じゃ、また会おうね」
私たちはそこで別れた。
「これから塾か」
帰ったらすぐに支度しないと…
なんでだろう…雪くんに会えて嬉しいはずなのに、素直に喜べない。
考えても無駄なような気がしたから勉強のことを考えよ…
「ねぇ、君。俺と遊ばない？」
……ナンパか。もう嫌だな…
「急いでいるので」
「そんなこと言わずにさァ」
「嫌です」
「ほら、楽しいところだから」
男は腕を掴んできた。
「何すんのよ！放しなさいよ！」
「オイ」
男の腕を掴んだのはさっき別れた雪くんだった。
「あのさぁ、嫌がってんじゃん。わかんない？」
「んだよ、ガキが。邪魔すんなよ！！」
男が雪くんに殴り掛かってきた。雪くんは避け、男の腕を掴む。
「テメェじゃ相手になんねぇな。早く消えな。じゃないと腕、折っちゃうよ」
ミシミシと音が聞こえた。男は顔を真っ青にして逃げた。

「よかった…姉ちゃん守れて」
「ありがと…」
「……やっぱさ、軽蔑しただろ？」
「え？」
「前まではいい子だったのが今じゃ不良だよ。姉ちゃん、軽蔑したんじゃねぇかなって…」
雪くんが悲しそうに言う。
「驚いたけど、軽蔑してないよ。だって、私のこと…慕ってくれるじゃない。家を捨てたのに」
「あれは追い出されたんだろ！？」
「捨てたも同然よ。変わったのはあなただけじゃないし…」
夜遅くにバーにいるなんて、私も不良でしょ？
「姉ちゃんには悪いけど、俺は帰ってきてほしい…」
「無理よ。もうあの家には戻れない」
「親父が帰ってきたら、戻れるのに…」
「父さんには会えないよ。約束を破って、どんな顔して会えっていうの…」
仲良くしていないもの…しまいには家を出てしまった。
「私、塾あるから家に帰るね」
「塾か…俺も家に帰るか。ババアがうるせぇし」
「あまり心配かけてはダメよ、雪くん」
「あいよ。じゃーね」
雪くん、今の生活に満足してないのね…
早く帰らないと遅刻しちゃう！私はダッシュで帰った。
授業を受けた…けど、
「仮定法、わからない」
……バーに行って教えてもらおうかな…
バーへと足を向ける。
「椿…ダメよ、こんな夜更けに。お肌に悪いわ」
「あの…ヒロミちゃん、英語を教えてくれないかな…」

「英語？どこ？」
「仮定法…」
「なら、教えられるわ」
と、私の隣に座る。
あ…ヒロミちゃん、美人だなぁ…元々まつげ長いのかな…
「ちょっと、聞いてるの？」
「あ…ごめん。ヒロミちゃん、美人だなぁって見てた」
「あなた、オサムみたいな事言うわね」
「だって、女の私より女の子らしいし…」
うらやましい…素直な気持ち。
「アタシはアタシ。あなたはあなたのいいところがあるわ。だから、オサムもあなたを好きになったんだと思うの」
「ヒロミ、コーヒー」
入ってきたのはオサムさんだった。
「はいはい。じゃあ後でまた教えてあげるわね」
「うん」
ヒロミちゃんは席を立ち、オサムさんは私の席から離れた場所に座る。
「椿」
低い声で呼ばれる。何だか、機嫌が悪そう…
「今日、男と一緒にいただろ」
「あれは…」
「ああいうのが好みなの？」
「だから…」
「あの笑顔も、見たことないし」
「お願い、私の話も聞いてよ…」
いつから涙腺が緩くなったんだろ…涙が止まらない…
「ごめん…」
「あの子は、腹違いの弟なの」
「腹違いって事は義母の息子ね…」

「うん…でも私を慕ってくれるいい子なの」
「ちょっと待て。話が見えない」
あ……そういえば、オサムさんには話してない…
「あの…私が幼い時に母が亡くなって、今のお母さんは義理の母。で、あの人と父の子が金髪の子の雪彦」
「ヒロミは何で知ってるんだ？」
「愚痴を聞いたのよ。あとはあなたのことを教えてたの」
「俺の事、ね…」
「ごめんね…私、言うのを忘れてて…」
説得してもオサムさんは不機嫌だった。
「雪くんといたって、どこで目撃したの？」
「ファミレスで仲良く話してるとこを見かけた。外から見たから、会話は聞こえなかったんだ。ごめんな」
「いいの。言わなかった私も悪いんだし」
「もう遅いわ。オサム、送ってあげなさいよ。椿、英語はまた今度教えてあげるわ。それかオサムに聞きなさいな」
時計を見ると12時半。
「俺が送るのは当たり前だ。じゃ、行こうか」
私の肩を掴み、車へと向かう。
「……俺さ、ますますお前から離れられないよ」
「え……」
車の中でオサムさんがいきなり言った。
「私も、離れたくないよ…」
私たちは口づけを交わした。
「あの…寄ってく？」
「いいの？」
「いいから言ってるんだよ。嫌ならいいよ」
「お言葉に甘えて、あがらせてもらうよ」
私はオサムさんを部屋に招いた。…そういえばこの前はこの人が勝手にあがり込んだんだっけな…

「インスタントコーヒーでいい？」
「いや、日本茶をもらうよ」
珍しいな…前は日本茶を飲む私を馬鹿にしてた気がするけど…
私は日本茶を二つ用意した。
「コーヒーもいいけど、日本茶もなかなかいいな」
オサムさんはお茶を一口含み、そう言った。
「私はコーヒーも紅茶も好きじゃないからずっと緑茶だったよ」
ちなみに言えば、ジュースもあまり好きじゃない。
「そうだ、英語の復習しないと…」
ヒロミちゃんもオサムさんに聞けって言ってたし、丁度いいかも。
「俺といるくらい、勉強から離れようぜ…」
と、私のところに近づいてくる。しまいには抱きあげられてしまった。
「ちょっ、何するの！？」
「ん？ナニかな」
意味を察し、私は赤面した。
寝室のベッドに降ろされ、オサムさんは私に被さった。
「大丈夫。優しくするから…」
ホントに…するの……？

～幸せ～

「ま、待ってよ！！」
私の言葉を無視してオサムさんは脱がしにかかる。
「お前…ちゃんと食べてるのか？」
「この間までは風邪であまり食べてない…」
「だろうな。抱き上げたとき軽かったし…じゃ、始めるか」
……そういうことに興味がない訳じゃないけど、実際するとなると恐怖に苛まれる。
「痛い思いをするかもしれない。けど、心配しないで……」
私たちは熱い夜を過ごした。

「ハニー、気分はどうだい？」
「……痛かった。けど…」
「けど？」
オサムさんは意地悪に言う。
「……気持ち良かった」
そう言うとオサムさんは私の頭を撫でた。
「可愛いなぁ」
「とりあえず、お風呂入る…」
「動けないだろ」
確かに腰が痛い…けど頑張れば動ける。
「大丈夫…ってうわっ！」
立ち上がろうとしたら抱き上げられた。
「無理するなって」
「無理させたのはどっちよ」
「うーん…初めてのお前に激しくした俺のせいか」
「言わないで！」

思い出すと恥ずかしい…でも、本当にこの人のことが好きなんだなってわかる…
「まぁ、一緒に風呂に入ろうぜ」
「……どうせ、イヤって言っても聞かないでしょ」
「わかってるなら話は早いな」
そして二人でお風呂に入った。
「私は英語教えてもらうためにヒロミちゃんとこに行こ…」
「俺に聞けばいいのに」
「オサムさんの場合は保健の勉強になりそうだから」
「……間違いではないな」
ヒロミちゃん、バーにいるかな…
「じゃあ俺は大学に行くよ。今日一日で課題終わらしたいから」
「うん……」
意外と真面目なんだなぁ…
「ヒロミのとこまで送るよ」
「ありがとう」
私をバーに送り、オサムさんは大学へ行った。
「あら、椿じゃない」
「ヒロミちゃん、おはよう。早速で悪いんだけど、昨日の続き、教えて」
「いいけど…オサムに教えてもらってなかったの？」
「……違う勉強したから…」
「顔が赤いわ。そう…保健のお勉強したのね」
ヒロミちゃんは察したみたい…
「まぁ、とりあえず続きしましょうか」
私の隣にヒロミちゃんが座る。その時だった。
「Ｈｉ，Ｈｉｒｏｍｉ」
「あら、ジャック」
ジャックと呼ばれた人が現れた。
「Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ？Ｈｉｒｏｍｉ」

「Ｉ'ｍ　ｆｉｎｅ」
「Ｔｈａｔ'ｓ　ｇｏｏｄ」
「……そろそろ日本語でいいかしら？」
「ヤー。久しぶり、ヒロミ。この美しい女の子は？」
「椿って言うのよ。あ、紹介するわ。ジャック・ボルフィード。日本語は喋れるから安心なさい」
「はじめまして。ツバキだね？ボクは１７歳だよ」
「え？私と同じ学年…？」
なんでみんな大人びているんだろう…
「あ、英語の勉強していたんだね」
「ちょうどいいわ。ジャック、教えてあげなさい」
でも……
「せっかくだからお話しよう？だいぶわかってきたし…」
「…それもそうね。理解もしてきてるしね」
「やった。ボク、ツバキに興味もったし」
「ダメよ。このコはオサムの恋人なんだから」
「えー…オサムの恋人かぁ…。なんだっけな……あ、オサムにはモッタイナイ、だ」
恥ずかしい…なんとかして話を変えなきゃ…
「ジャックはいつまで日本にいるの？」
「Ｏｈ…ボクはずっと、かな。学校も行くし」
学校は結城学園かな…
「ボク、ツバキの学校行きたい」
「ダメだよ。それこそもったいないよ」
「いいの。行きたいから」
ジャックの強い決断に私は戸惑った。彼は頑固なんだろう。だから私の高校を教えた。
あゆみにまた何か言われるんだろな…
「ボクはお父さんとここにきたんだ。家が恋しいけど、日本はいいところだから」

私も家が恋しいよ……あ。
「まずい…実家に忘れ物がある…」
母さんと父さん、赤ん坊の時の私の写真…
「行って大丈夫なの？」
「すぐだから…じゃ、行ってくるね」
私はバーを出て、実家へ向かった。

～災難～

私は実家に戻る途中、雪くんに会った。
「姉ちゃん、どこに行くの？」
「あなたの家に忘れ物をしてね。取りに行くの」
「…一緒には暮らせないよな…」
当然だよ…あの人が嫌がるから…
「とりあえず、すぐに帰るから…」
実家に着き、雪くんは普通に入る。が…私は入れなかった。
「母さん、姉ちゃんが忘れ物取りにきたって」
「お久しぶりです……秋子さん」
小さいとき、『お母さん』って呼んで怒られてしまった…だからこんな風に呼んでいる。
「雪彦、この人はあなたの本当のお姉さんではないのよ」
やはり…まだ嫌っているのね…
「うっせぇよ。どう呼ぼうが俺の勝手だろ」
「様子がおかしいと思ったら椿さんと関わっていたのね…椿さん、息子に付きまとうのをやめてくださる？」
「意味わかんねーババアだな。姉ちゃんとはつい最近だよ。しかも姉ちゃんは付きまとってねぇし」
「とりあえず、少しだけ上がらせてもらえませんか？すぐに帰りますので…」
おかしな話よね。ここが本当の家なのに帰れないなんて…
「母さんの返事なんかいらないよ。入りなよ」
「雪彦！！」
なんとか入れたが、私の物は捨てられてないかな…
私の元の部屋は2階だから階段をあがる。
部屋に入ると出ていった時のままだった。
「俺が死守したんだ。姉ちゃんとの思い出残したくて…」

掃除も…されてる…雪くんが全部やってくれてるのかな…
「姉ちゃんの忘れ物ってなに？」
雪くんの質問に答えるために机の引き出しを開けた。
「この写真は…親父と…？」
「私の本当の母親と、赤ん坊の時の私。これでもう用も…」
「椿さん。人の家に勝手に上がり込んでどういうつもりなんですか？まだお金が足りないの？」
『人の家』…？もう、我慢の限界だった。
「ここは元々私の家だったのよ！！上がり込んだのはアンタでしょ！？お金ですべてを解決しようとして…最低だよ！！！」
長い沈黙が続く。もうこの家には用がない。階段を下りようとした時、
「待ちなさい！！」
秋子さんに腕を掴まれた。
「放して！」
振りほどいた瞬間、私はバランスを崩し、階段から落ちてしまった。
「姉ちゃん！！」
雪くんが慌てて私のところへ駆け寄る。秋子さんはうろたえていた。
「大丈、夫だよ」
と言っても、全身を強打しているのであまり大丈夫じゃない。
「今、手当をしますわ…」
「必要ない」
私は義母を睨みつけた。
「私はもうここには来ないので安心して下さい。雪くん、あまり私に関わらないで」
「なんで…」
「関わるな。お願いだから…」
「……あまり近づかないようにするよ」
私は必死に立ち上がり、よろよろしながらも橋口家を出た。
「椿！！」

ヒロミちゃんがいた。なんで…？
「気になってつけたの。バイクの後ろ乗って！」
ヘルメットを渡され、私はバイクの後ろに乗った。
ヒロミちゃん、やっぱり男なんだな…しがみついてると、体がしっかりしてるのがわかる。
「とりあえず、バーに行くわよ。オサムも来てるはずだし」
「嫌だ…私の、家でいいから…」
傷だらけの私を見られたくない…
「……わかったわ。行きましょう」
わがままなのはわかってる…けど、醜い私の姿なんて…
「アンタ、動くの辛いでしょ」
「肩貸してくれれば歩けるよ…」
「もう、アンタは意地っ張りなのね…」
私はお姫様抱っこをされた。
「ヒロミちゃん！」
「鍵を出して。早く」
ヒロミちゃんの鋭い瞳に逆らえず、私は鍵を渡した。
「よし。お邪魔するわ。椿の部屋はどこ」
「すぐ…右に曲がったとこ…」
私は疲れもあり、意識を失ってしまった。
「アンタは…強いのね…」
「……あ」
すぐに気がついた。でも手当されてる…
「悪いと思ったけど、脱がしたわ」
「…ううん。手当するだけでも有り難いよ」
「……前にアンタがアタシのことを羨ましいって言ったわよね…アタシはアンタが羨ましいわ…」
いきなりヒロミちゃんは悲しい顔をした。
「アタシは自分が男であることに納得がいかなかったの。でも中学2年まで男の格好をしていたのよ。それを理解してくれる女の子が

いて、その子と付き合ったの。だけど、別れたのよ。私が女装したのを見ただけでね。結局、理解はできなかったみたいね…」
「ヒロミちゃん……」
受けとめられないのかな…たしかに、最初会った時は驚いたけど…
「ヒロミちゃんの男の姿を見てないからわからないけど…ヒロミちゃんは、男の人と女の人、両方理解できるじゃない。それって、素敵だと思うよ」
曇っていたヒロミちゃんの表情が一転して驚いた表情をした。
「椿…あなた…」
「もう気にすることないよ」
「ありがとね…」
突然ドアが開く音がした。そこにいたのは息を切らせたオサムさんだった。
「っはぁ、椿……」
「オサム、さん…」
「さて、アタシは帰るわ。ジャックに留守番頼んじゃったし……オサム、あとはよろしくね」
「あぁ……」
ヒロミちゃんは帰った。部屋にいるのは私とオサムさん…長い沈黙が続いた。
「大丈夫か？」
「うん……手当もしてもらったし…」
オサムさんの顔を見ると、辛そうな顔してた。
「ヒロミから、電話きたよ。詳しくは聞けなかったが、お前が怪我してるって…」
「実家に帰ったの……そしたらちょっと、ね」
「ちょっとか？これがか？」
腕を掴まれた。多分オサムさんは軽く掴んだんだろう…でも痛かった。
「痛いか？」

「大丈夫…」
「そんな痛そうな顔して大丈夫って言われても説得力ないぞ」
オサムさんは手を放し、私の頭をそっと撫でた。
あとで、きちんと話さなきゃ……しかし、いつの間にか眠りに落ちていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0751p/

変恋

2011年10月6日20時28分発行